

威令

将帥というものがたった一人の身をもって、天下国家数百万億兆の人々を束ね、人々が俯（うつぶ）してその命令を聴き、仰いで視ることなく、息を静めて心から屈服してこれに従うということは、けっして容易なことではない。それゆえに将とは常にもろく危うい任務なのである。もしも自他への法制の適用が適正になされる者でなければ、人はどうして従うことがあるか。危機に処してその危うさを慮（おもんばか）らないような者は、主将にしてはならない。上の立場にありながら下の者の心情がわからず、自分は安穩としながら民の困難を思い煩（わづら）わないならば、大衆の怨みをどうすることもできなくなるのである。雑草を双葉のうちに摘んでおかずに放っておけば、後で斧を用いなければなくなる。小さな火のうちに救出しないで、大きな火炎になってからどうしようというのか。水がわずかに漏れているうちに塞がなければ、後には江河となってしまふ。例えば、身分の低い者への刑によりこれを令すべきなのに、将帥に適用する法を以って厳しく罰することで、人をその命令に全く違反できなくさせるのは、即ち孫武や穰苴の類である。偉勲を高く賞すべき時に賞を与えずこれを威圧し、贅沢三昧の貴族たちばかりを取り立てることで、人がその命令に従わなくなるのは、即ち夏の桀王、殷の紂王の類である。これゆえに、命令は軽々になしてはならない。古き昔の良将には、命令の四箇条というものがある。命令というものは、これを示すのに進退を以ってする。それにより、人は禁止されていることを知る。これを理解させるのに仁義を以ってする。それにより、人は礼節ということを知る。これを重視するのは是非を以ってする。それにより、人は勸善ということを知る。これを決定するのに賞罰を以ってする。それにより、人は忠信（忠節と信頼）ということを知る。禁止・礼節・勸善・信頼は、いわゆる師の大経（たいけい）Ⅱ不変の条理・法則）である。これまでに、命令が正しいものであつて人がこれに従わなかつ

たことは無く、人がこれに従って心が剛毅になるとときには死を恐れなくなる。兵自ら進んで死んでゆくようであれば、戦（いくさ）は必ず勝つ。このようにして我が士卒の全員が道義に殉ずる時は、貧しく賤しい身分であっても天地の中で何ら恥じるところがなく、たとえわずかな兵力であつても大敵を恐れることもないということを知つて、上級と下級の皆が「義」の心を鉄石のごとく強固にする時、初めて「大治※」による統治がこの道の上に止まることを知っておかねばならない。

（※）河陽兵庫之記一「順徳」参照）

従来、人の世の榮枯死生の事は天命であり、いささかも人間の思慮や按排（あんばい）の及ぶものではない。進んでも死なず、退いても生き残れないこともあるのだということを肝に念じて、無益な工夫などせず、未練の分別を捨て、専らに、ただ後世の名を汚してしまう事が何であるかを知り、兵が皆執着を離れて、目指すべき道を勇ましく躍進すべきである。このことをしっかり承知しておかねばならない。何より惜しんでも惜しみきれないものは、後世でその名に嘲（あざけ）りを受けることである。命は棄てることも棄てないこともあるが、ひとたび名を穢されては再び還ることが無い。ましてや人生の生死無常は、電光石火に跡無きよりも儂（はかな）く、露よりも化（あだ）なるもので、幻よりも定めなき物であればこそ、いかなることがあろうとも一時の身命により、末代に残すべき家名に瑕（きず）をつけることがあつてはならない。そんなことがあれば、嘆き、又さらに慷慨（こうがい）世の中のことや自己の運命を憤り嘆くこと）することとなろう。このような心をよく分別すれば、上下親疎の隔ても無くなり、ただ一日の心中を互いに勇気づけ、元気づけ、万一にも公私の「義」に赴くところ、これを逃れ難い時には、諸人の表に立つて名誉を後の世に顕（あら）わすことを思うべきである。各々が我心の「大治」を治めようとすることを知る時は、四方に敵はいなくなるものである。四方に敵無くして、治（平時）にも勝ち、乱（戦時）にも勝つ。これを知るための令である。